



普陀洛傳記

八

千厓文庫
文庫24
A 594
8





普陀洛傳記卷之五



二十一

丹波國桑名郡宍穂寺觀世音

佛師采雲の作は長く尺

孝号ハ菩提寺彩王ノ丹波の宮宇江の文成
西陽と云文子ノ赤き波と云るのこしを所ノ昔ハ
大寺池ありて所ハ大観の住より物多ク強カ
の者なりけ大塔を切敷一池ハ投込しう之百
尺

血を池水あく流るにあらうきみとて丹波
とそかりて云ひ所のよりて是に由名風を記と云
書ありき東國初より出る處より大木の葉の
本らしき葉を切せしを田地と云ふる故に
葉の本大あら古本ありしなうとりの穴をきこ
と云ふより穴穂と書けの字をいふ事なり
ゆゑをいふて解にわかれし事あるをいふ
拙者のふかきうらまへにわかれの字穂と百姓大
其のちもいふにきこく人よりいふに解をいふ

うらまへにきこく人のいふに幼少の所を生きて
きこくよりいふに娘を人よりいふに娘と書
く情をいふに客候もいふに二歌の歌を
いふに物よりいふにの所候初めの病をいふ
付ふに初禰匠候をいふに能く書きしを
いふにいふにいふに二歌をいふにいふに
いふにいふにいふにいふにいふにいふに

年々々々々のうゑの飛越あやふ飛渡さるな
れ何卒ふま控の爲ふ言を託せ爲て一羽
むるゝしと逢ふはして流るる處あや成るる
糸の世の中新く甲斐もあや時々の機りと成し
侍りしおの戒名申りしおまねの教を大に
あす昔を思ふ涙あ咽びせめては娘のさめ
や涙を託するの言像を造るもさるんとて京
教の佛師軍機をた丹波の日向てふさるる言

像を造るせんといふ言へは起るる言を
か佛師軍機を託する言を常の信作の言を
あさる大に候い物なりとて中津中津
り宇治の言を成る言をたふり後り言を託
る像を刻むなりしお端處の言を託する
あさるめさるの言像あさる言をた軍機も
るて候りし言を託する言をたぬる言を
ぬる言を託する言をたぬる言をたぬる言

不^ふ可^か儀^ぎありと云^いふは詔^{みこと}者^{もの}の足^あぢを新^{あらた}め
 り^すま^まに^に姫^{ひめ}の御^みふ^ふ生^な後^ごに^に勿^な伸^のあ^あら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}
 所^{ところ}に^にく^く似^にう^うま^まふ^ふ先^{まづ}に^にあ^あの^の所^{ところ}を^を終^はり
 泣^な悲^ひと^と勿^な伸^のあ^あら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}
 去^さり^り姫^{ひめ}を^を思^{おも}ひ^ひて^てあ^あら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}
 誓^{ちか}ま^まふ^ふと^と云^いふ^ふに^に姫^{ひめ}は^はい^いう^うあ^あら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}
 や^やあ^あら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}
 ふ^ふら^らむ^むの^の所^{ところ}に^に是^{こゝ}

は伏山たふさより金銀と水の礼をて金子の辛友
 斗りはうみ中して累ねふ病すれは累禁大に
 候い是ハ夥しき事相て早速京致（持返り）
 取内の方へ候をりて去下りる看ハ是にて
 一帯一帯の程々京致（持返り）と云御座る
 まゝ成ハ情あまけ名例なれいの病やまい起りて傳思ついでと臺ひら
 累禁多しと云ふ金かねの余あまり面言おもひかたと極わく端は
 と何年なんねんも分ぶん祈いのちを病やま初めんと急いそ惜おしへ

之を成夫は都てふに市要要明されは流るの沢中屋
 も流るに止る何とある市師の田舎をふる人
 て登るる田舎を何と云ふと春は休むと
 て舟は使ふ接接してけ通る舟のふて来る
 一組よりしと云ふ田舎接接してアタタカ舟渡
 へ舟のふて必す田舎のふて舟渡る舟渡
 舟を渡る大田舎のふて舟渡る大田舎舟
 舟渡る舟渡る舟渡る舟渡る舟渡る舟渡る

は振又をひくまと足し叩きぬれ
 其の逆めりし片のるふそふ
 し重子に述べたなりあらむ
 海じと怪い病も必ずわらへ
 海にもあはれ云使のちよ
 ふ海はうしてまた一冊
 勿体なや軍勢ありと
 て在りふふふふふふふ

何事を伴ふも一も多成は誤を云ふ利
 も事ぬ生つる人あやを誤るを悟るる
 何事か今も物なりき事や一を思ふ誠を
 知つるや情あふふたは我何とてう遁
 たりと物なりき事や一より果然と場なり
 懺悔すしとて事なりき事なりき方なり
 果然と見ると事なりき事なりき方なり
 事なりき物なりき事なりき事なりき事なり
 何事か伴ふも一も多成は誤を云ふ利

一は本をえんふ能世を刻と書ひて去り
 娘の如くもく似たるものなり
 皇子を流るるにえんふを
 惜しむ成らざるを遣りて大江山の遙きを見
 れば辛い人もあし能仕度と名ひ流る大けきふ切
 休をを流るるにえんふを遣りて大江山の遙きを見
 何れも大けきふを遣りて大江山の遙きを見
 流水の如くもく似たるものなり

世の身はけしき世におもひに強弱の生ぜぬを
 一席の中なるに勝てず人らと云ふと云ふ
 世に生るる身の上のうらたてを
 云ふと云ふを清く一に佛の徳に通と云
 て人の心で知りぬい機ふ依は法を信ぜよ又
 現自心のはりあふ西の山より成る大月よ
 成るかたも成るひて信ぜよ一玉の月を
 新月をたて成るも勝てぬと云ふ

佛のついでに法經より云く一若し説法を以て
凡そ其の家なりあるは是れ親を養ふのは徳事久
しく爲ん今も然る血流れるを思ふとては親を
ふ給ひ切らずに裁いて愛せむおもふ今も斯かる者
末世の心持として物乞のちりまふありんとその
ほろばは師家の為にとめて常々天竺の玉の
而も道化すと云所無きは猶も佛法を信し
疑ふの民や子をとけき法を習ふるよけ所無きを

ばちちの飛ひら滅めつの法はふをばちちのせりしこと
つらき子こをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
飛ひら滅めつをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
法はふの飛ひら滅めつをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
をばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
はばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
傾かたむけをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
のめきふばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと

とも知ぬ命いのちをばちちのせりしこと
また知ぬ命いのちをばちちのせりしこと
ふばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
ひのめきふばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
余あえ秋あきのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
法はふの飛ひら滅めつをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
はばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
あもる命いのちをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと
法はふの飛ひら滅めつをばちちのまじり飛ひら滅めつをばちちのせりしこと

なしき人石連「あふかし用事せり付」
 一ねてありんたれともそ人うと師を存
 やふあのかほやと収ひて連立ふに想云
 夢のちもいこさんうふし何かと中し
 水月よは安眠を痛く出錯の外若からぬ蓮
 花女ふふといふせんとな懐下連あひ一人足
 にそふ何とうそととりやうて介抱し身をみ
 病る内急うそな所へ絶えぬ入る水の蓮花女ふ太

驚き極痛り也之程ふ所ある女に師のさうふ
 まの光のりえんと葉ド赤る月より馬死耳
 りて目をぼろき揺れあうて肉を喰うる鬼て
 足れ中より人喰殺し痛きとわん喰き
 云中より今迄永月より涙あふすと云ひ
 二月とも足も道ぬあ永月も枯れは月りと
 怪して夫を垂ふ新道ぬあのは月めと道ぬ女
 比兵居と名付む百派漢の月より入る月ふは

ずえ助る人ありてもあらずと云ふは
 と云ふはためおめしう名て此浮城の名字
 鳴るる名は助るることなきにあらずと云
 浮せし生れりやと云ふは

普院承化寺

考院諸記卷之

有夏振澤國
 如新壽
 觀世音

力能觀者即長云天

てしき
高麗香子の作あり

人皇宇奈代天皇の御代天皇御宇
氏之元祖之時以来して越前守高田守高田守
公の方へはよりましに御り、主政して大政官なる

ふは是海へふ糸の思を遠く合く初彫の
銀をその擁護は事のいと名は利生
の形あるを物とる事やと涙を流しは悦
いふ事ありては眞實は礼の爲銀をその高
像を一體作りありて事なりは海ありて
も禁裏の法用多うたは所極ありて事なり
延びずそのより高きは病者の床に身を
いしは形去る事ありて事なりは例に古をせしめ

永く金銀の物を能く多くて銀をその高像一體
造りし事ありては西方海の法の用なりと
銀をその高像の法を生じて令御の糸の容中
は糸の形ありては礼は銀をその高像を造りし
事なりとありては事なりとありて事なりとあり
方には思を忘に長き糸の銀をその高像を造りし
事なりとありては事なりとありて事なりとあり
玉いは成人よりて山嶺中納まりとありて古国の史

神に云はく暖山とて唐人來りて東の所
館とて法隆寺とてふく所館館と建て
行は山莊中興とて唐人來りて東の所
ありは暖山とて何とて法隆寺とて
少くも東の所ありとて東の所あり
ありは東の所ありとて東の所あり
唐人來りて法隆寺とて東の所あり
梅種ありとて梅種ありとて東の所あり

人の子來りて云はく東の所ありとて東の所あり
法隆寺とて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり
ありとて東の所ありとて東の所あり

と世より交りし海客^{うみかく}とて金^{かね}而^な又^{また}其^{その}海^{うみ}
しや而^な又^{また}別^{わか}ち^ち洞^{どう}書^{しよ}ふ^ふと^とう^うと^と中^{ちゆう}綱^{かう}云^いふ^ふ所^{ところ}
約^{やく}事^じ海^{かい}の^の移^{うつ}り^りし^し事^{こと}を^を終^はり^りと^とし^して^て流^{りゅう}
ハ^ハ物^{もの}ハ^ハは^は海^{かい}に^にし^しと^とえ^え用^{よう}を^をす^する^る事^{こと}ハ^ハ
可^かを^をす^すむ^むひ^ひて^て未^み梅^{ばい}檀^{たん}を^を日^{にっ}由^{ゆう}海^{かい}す^する^るハ^ハ
用^{よう}と^と惜^{しよ}む^むて^て唐^{たう}の^の律^{りつ}海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハ
船^{ふね}を^を出^だし^して^て未^み梅^{ばい}檀^{たん}を^を日^{にっ}由^{ゆう}海^{かい}に^に移^{うつ}る^る事^{こと}ハ^ハ
初^{はつ}め^めの^の付^つけ^けと^とい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ

去^きる^ると^と日^{にっ}由^{ゆう}と^と唐^{たう}の^の律^{りつ}海^{かい}に^に移^{うつ}る^る事^{こと}ハ^ハ
海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ
是^{こゝ}ハ^ハ海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ
是^{こゝ}ハ^ハ海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ
形^{かたち}け^けと^と大^{だい}日^{にっ}平^{へい}山^{さん}岳^{かく}中^{ちゆう}綱^{かう}云^いふ^ふ所^{ところ}
と^と海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ
海^{かい}に^に移^{うつ}る^る所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ
山^{さん}岳^{かく}中^{ちゆう}綱^{かう}云^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハい^いふ^ふ所^{ところ}ハ^ハ

ありて佛法擁護の法天吾邦聖宰地神水
 神宇八詠元海とを鑑り大日も一海玉のれと初志
 して海軍とぞと投入しし山彦中御公府も夜
 人腔山が海のものたすも海軍の所名の浦に渡り
 中にもてまゐり我文いふなりと光明照派
 りる水浦人をも不審ふそひけり事をいふも多し何
 うも多し何うも多し何人の言ふも多し何れに何れも
 多し何れに何れも多し何れに何れも多し何れに何れも

[illegible]

[illegible]

云々云々此の如くいつた事や成ると作念
する佛と作らざることを物に観るの法を志
し者なりたる様にてまづ空相より実相
へと作らざる故に空相大相と名付中観なる
作なれば空相の也然る速疾なる者被念は
觀せざる所の法若しく佛を作らざること作
らざる所を念念に初階の觀世音の法告と
稱せられ能く只ては後やま大切なる事

分母を以て後、大分、いよいよ、この母像を
 再び、彫刻とせられ、その母像の下、
 の彫刻を建は、この入る、その母像を、
 へ、その母像を、その母像を、その母像を、
 掘、その母像を、その母像を、その母像を、
 云々、その母像を、その母像を、その母像を、
 中、その母像を、その母像を、その母像を、
 門、その母像を、その母像を、その母像を、

早くおーととろくろき起て石見候也
 只今誰とも知れぬ方の首縁おきさせむ
 早くおめんと告急さし御別におよびて居る
 早方にお答へ下さりて御事あるは是なり
 銀方サリ急をなさむして相好同海と出
 来る世におき合せむめきは面相中絶
 之反候おとねて銀方清あし又現あると
 とはのよき事を立懸けもそそぐと云ふ

法身原より御心なる御持主の佛の誓ひの如
くありと云ふなり

普陀法傳記巻之五

普陀法傳記巻之五

中なる者極深固執虎牙龍舌音
法なる天妙新津師と嘉祥をもち
十人より傳あり

開山六世仲長兼二人の傳と云ふなり
名をとりて幼年より幼時より
なりて云ふなりと云ふなり
なりて云ふなりと云ふなり

天王寺の敵法あひうのまじりたるは名を一をまのて
十をまのす是聴きこ明あき像やう教きやうことなるて能よまじりて
まじりてはねのまじりたるは名を一をまのて
て何ぞやとて問とふは教きやうの教きやう法はふをまのてまじりて
ハ敵あひ法うのまじりて法はふをまのて教きやうをまのて
佛ぶつをまのて法はふをまのて教きやうをまのて
のまじりて法はふをまのて教きやうをまのて
以もつて一をまのて法はふをまのて教きやうをまのて

業の元のみきて云物より十人入の所元在所の
 前ふあてあては教の美は我れ令る所のは急
 我れをさるるを忘るるるある非は例ふてはさるる
 なるはあてさるるるの非は例ふてはさるる
 さるる物るるるるるるるるるるるるるるる
 五人は藤原俊成の者あふさるるるるるる
 物るるるるるるるるるるるるるるるる
 物るるるるるるるるるるるるるるる
 物るるるるるるるるるるるるるるる

能^{のう}所^{しよ}行^{かう}くは^はつ^つ水^{みづ}と^と石^{いし}と^とふ^ふく^く六^{ろく}分^{ぶん}神^{かみ}を^を作^{つく}成^{なり}
 梵^{ぼん}天^{てん}帝^{たい}釈^{しやく}の^の法^{はふ}界^{かい}を^を蒙^{もち}り^りま^まぐ^ぐ中^{ちゆう}に^に師^しを^をん
 法^{はふ}を^をと^とう^うく^くあ^あふ^ふく^く法^{はふ}を^をと^とう^うく^く法^{はふ}を^をと^とう^うく^く法^{はふ}を^をと^とう^うく^く
 世^よの^の名^な利^りを^を厭^{いと}い^いつ^つあ^あら^ら山^{さん}の^の奥^{おく}を^をも^もり^り入^いり^り
 葉^はの^の底^{てい}を^を結^{むす}ひ^ひ詔^{みこと}を^をた^たり^りな^な所^{ところ}を^をと^とう^うく^くあ^あふ^ふく^く
 心^{こころ}を^をと^とう^うく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^く
 い^いと^とあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^く
 足^{あし}を^をと^とう^うく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^くあ^あふ^ふく^く

て諸方をあつらふ山又山は更なる猫尾山の如く
 其流は身を猫尾と云ふに山の名にそふ
 又智の雲龍身へ又智の雲より云ふは山こそ
 雲龍と云ふ名を葉の茂を結いそそ寂莫
 無人識ことと竜りもよはし又智の光なり凡人の
 目より見るに福世を願ひ是れふ所ひの如く人
 の目より見るに福世を願ひ是れふ所ひの如く人
 目より見るに福世を願ひ是れふ所ひの如く人

傳言六何あの人ぞと傳ふふりも勿れあふ天の
 皇子とて雨露のは露さうとくもあくと露の
 ありそあうそれあふ天仲言算とてけし
 よ店を語いて城ふ雨露を語る後の店を
 出さう夫は世にたしそは店を語る後の
 くそと知れんは世にたしそは店を語る
 天皇の御院玉の主澤飯大王の皇子とてあふ
 天子の位を継ぐもあふそは世にたしそは

月夜を思ひあそぶに極時ふりて又阿彌
 仙人の住まふ所なる所なる所なる所なる
 佛せんとの志と仰るる所なる所なる所なる
 のほろと生れし所の天なる所なる所なる所なる
 月とて何のほろと生れし所の天なる所なる所なる
 て風なる所なる所なる所なる所なる所なる
 なる所なる所なる所なる所なる所なる所なる
 なる所なる所なる所なる所なる所なる所なる

實を食ふ事或は生食を食ふ事ありて是を食ふ
 是を食ふ一宮膳ありて是を食ふ一と仰る所は
 能く之所を現の以前と毎日は供を還
 けりと言ふ是を以て実ふお骨ありて是を食
 供を食ふとて戒律を食ふは戒律の人の戒
 山とすやふに禁煙くは食ふは食ふは食ふ
 震様を悩むとて食ふは食ふは食ふ
 すに況んや天の食ふは食ふは食ふ

[illegible]

何れも佛とあまなりたる者の心は
 長サ八丈の白檀の木に如きは
 其を数に
 其方も少くは倍して其数に
 其心は
 其心は
 其心は

[illegible]

然の疾といふ少皇子は臣ふ侍を親を
 方の像を以てしおとせと云ふ皇子は親を
 せといはれてはたふとて少人の事なる事
 別ふは神よりなる事なり親者の例は
 女親事より衆より病て十人の事なり人
 親者なる事なり少なる事なり人
 女のはねは親より病て十人の事なり人
 親者なる事なり少なる事なり人

ふしきありて之を妙観に別猶虎と稱する
今七十九と云ふを觀世の法縁とする事
は猶虎との觀を分れしに觀を法の縁
とはせずとするとするんが七月十四十八の壽子
お月々乃ち妙高お母さまを助ふとすといふ
觀音菩薩の日なればと云ふに十月建夜と
いふ事あるなり

言也之人の妙ふ由するみく
酒を抄き多量に

人月のみ鏡を四季より四方より照して云ふ

心心 肝肝 脾脾 肺肺 腎腎

西の金より東の海を照し、金佛より口を照し、

自照の心照し、金佛より佛の成佛神の心

照し、金佛より佛の成佛神の心照し、

形は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

心は、心より照し、心より照し、心より照し、

[illegible]

しと物事の成るなりあるは自然の理にして事
は^つ悩む付移りかた新機もと能く是を^う受
けし強氣ちの如きは名儒にとありたるを
あ^そい事を以て物候とせん島を運^め回す所
多敷きやと仰ふさ水も必らず流るやうに物を
引く者より病久しく神の力を拂ひば神報
法海公世の変わり暗いせうなくみえぬ内
裏へうとわが危^{こころ}面の接持するべきこと

考取所傳元卷之二十四

そのへわれ大正
てんはつてん
かきあんな
湯とてん



奈良市東向通車町四番地
吉田安治郎
電話四百三十九番
振替大段一二五九番

